

小樽の歴史的建造物を巡ろう

原風景の祝津から近代建築の縮図まで

色内の建築とトップランナー

1873（明治6）年、日本で最初の工学校（明治10年工部大学校に改称）が開校し、そこに造家科が開設された。現在の東京大学建築学科の前身になる。77年にイギリスからJ.コンドル(Conder)先生を招聘し、本格的な西洋建築の教育が始まった。

さて、小樽の色内地区には工部大学校から東京帝国大学に及ぶ卒業生の設計した明治・大正・昭和の建物があり、日本の近代建築の系譜が凝縮している。建物のデザインは、ギリシア・ローマ時代の古典様式、イタリアのルネサンス様式、パリから発信されたアール・デコ、戦後世界規模で広まった国際様式の流れが一体となっている。まさに色内は、「近代建築の縮図」といえよう。

工部大学校造家科第1期の卒業生4人のうち、辰野金吾、佐立七次郎、曾禰達蔵の設計した建物があるのも特異である。

まず、佐立七次郎が日本郵船小樽支店（明治39年）を手がけた。壁に石を積み、1階の柱をギリシア・ローマ時代の様式で飾り、2階の壁には皮に似せた金唐皮紙を張る。コンドル先生の教えを誠実に表現したこの建物が小樽の近代建築の水準を高め、以後の建築家に刺激を与えることになった。

辰野金吾を顧問とする日本銀行支店（明治45年）の設計では、日本郵船を意識して支店長と本店の設計部が情報を交換した記録が残っている。さて、日銀小樽支店では、当時最新の技術と材料が採用された。屋根の骨組みに鉄骨を使い、鉄板の下を防火のためにコンクリートで被覆した。外壁と基礎にれんがを積み、表面にモルタルを塗った。これは本店でも見られない最先端の設計だった。辰野の愛弟子の長野宇平治（帝国大学明治26年卒）は技師長として設計を取りまとめ、斜め向かいの北海道銀行本店（明治45年）も同時に設計した。

曾禰達蔵は、三井銀行支店（昭和2年）の設計を中條精一郎（東京帝大明治31年卒）と組んで行った。イタリア・フィレンツェから広まったデザインと耐震構造を組み合わせた。ルネサンス様式は、石積みの外壁に大きなアーチを連続させ、軒に細かな装飾を施し、一際異彩を放っている。骨組みは大正12年の関東大震災の被害をふまえて、鉄骨と鉄筋コンクリートを一体化させる最新の構造だった。

佐立七次郎が石造で日本郵船を設計してから、わずか21年後に曾禰達蔵らは現代建築で採用する鉄骨鉄筋コンクリート造で三井銀行を建てたことになる。小樽色内の建物は、近代日本の建築技術が短期間で飛躍的に進展したことを示している。

大正時代、小樽色内1丁目に鉄筋コンクリート造の建物が帝国大学、東京帝国大学の卒業生によって設計された。矢橋賢吉（帝大明治27年卒）の北海道拓殖銀行支店（大正12年）、中村達太郎（工部大学校明治15年卒）と田辺淳吉（東京帝大明治37年卒）の第一銀行支店（大正13年）が交差点で向き合っている。当時、矢橋は国会議事堂の設計を取りまとめ、また田辺は清水組（現清水建設）技師長を辞して独自の設計を手がける注目の建築家だった。

また、日本銀行の真向かいに対峙する三井物産支店（昭和12年）は、松井貴太郎（明治39年東京帝大卒）の設計。そのデザインは、和光荘と同様に幾何学的な形を用いるアール・デコであった。これは同時期にニューヨークの摩天楼でも使われた装飾であり、三井物産をそのまま縦に伸ばすと摩天楼になる設計だった。三井物産の山側に隣接して小樽地方貯金局が小坂秀雄（東京帝大昭和10年卒）の設計で昭和27年に完成した。デザインは世界的に共通する国際様式（インターナショナル・デザイン）であり、装飾を用いず、ガラスで室内を囲い、バランスをとる構成を旨とする。小樽地方貯金局は国際様式の初期建物になるが、その斬新さは気づきにくい。なぜなら、国際様式はその後、学校や事務所建築に広く普及し、見慣れたデザインになったからである。小坂は郵政省の技師であるとともに、外務省庁舎やホテルオークラを手がけるオール・ラウンドの建築家でもあった。

小樽色内の緑山手線は、これらの建物がまちなみをつくり、近代日本の建築の流れが簡潔に見られる随一の通りである。「近代建築の縮図」と言う所以である。

text 駒木 定正（建築史家・工学博士）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.